

龍樹造・中論無畏疏(前續)

寺本 婉雅 譯註

第一品

「觀六種品」第五(Dhātu-parikṣā)

此に曰、諸界は存在す、相の安立を教示せんが爲めなり。此に釋して曰。

①「虚空の相(り)先きに、

//Nam-mKhañi mTshan-ñid Sha-Rol-na/

虚空は僅少も存してあらず、

/Nam-mKhañ Cui-Zad Yod-Ma-Yin/

若し相より先きにあらば、

/Gal-te mTshan-Ias Shar-Gyur-na/

無相に墮すべし」。

/mTshan-ñid Med-par Thal-bar-ñGyur//

「空相未<sub>レ</sub>有時、

//Na-ākācañi vidyate kinñci

則無<sub>レ</sub>虚空法

piṭvram akāca lakṣaṇāt/

若先有<sub>レ</sub>虚空、

alakṣaṇaṇi prasajyeta

即爲<sub>レ</sub>是無相」

syāt piṭvram yadi lakṣaṇāt// (p. 129)

/Vor dem Kennzeichen (Merkmal, Eigenschaft) des Raumes (ākāśa) existiert nicht irgend-  
welcher Raum/ (Denn) wenn er vor dem Kennzeichen wäre, so würde eintreten, daz er  
ohne Kennzeichen wäre// (p. 28)

此に虚空の相の先きに、虚空は又僅少も存在せず。此に是れを思惟するに、若し存在せば、過失は  
云何になるべしと思惟するや。それを釋すべし。

③「若し相より先きにあらば、

④無相に墮すべし。」

/Gar-te mTshan-I-as Sjar-Gyur-na/  
/mTshan-Ñid Med-par Thar-bar-ñGyur//

若し虚空の相の先きに、虚空の存せば(以下)、虚空は無相に墮するが故に、そは亦正しからず。そ  
こに是れを思惟するに、相無きも尙虚空は存在すと考へば。

①、②の二句は本偈に略されてゐるから、長行中の③、④の後二句の文を以て補入す。

此に釋して曰、

②「無相の存在は、

//mTshan-Ñid Med-pahi dNos-po-ni/

決して何處にも有ることなし、

/h(fah) Yai Gañ-Nahai Yod-ma-Yin/

①無相の存在なきことか、

/mTshan-Ñid Med-pahi dNos-Med-Na/

②相は何處かに轉(定)置(置)せらるべしことか。」

/mTshan-Ñid Gañ-du hJug-par-ñGyur//

「は無相之法、」 云何なる無相もなし、  
/Alakṣaṇo na kaṣ ciccā

一切處無有、 存在は何處にも見出されず、  
bhāvāḥ sanividyate kva cit/ (p. 129)

於無相法中、 無相の存せざるを、  
Asaty alakṣaṇe bhāve

相則無所相。」 相は何處にか置へんや、  
kramatān kuha lakṣaṇān// (p. 130)

/Nicht existiert irgendwelches kennzeichenloses Ding/

Wenn ein Kennzeichenloses Ding nicht existiert/ an was soll ein Kennzeichen herantreten ?/

(p. 28)

全く觀察するに、無相の存在は、決して何處にも有ることなし。

③「無相の存在な<sup>ら</sup>ず<sup>か</sup>、」  
/mTshan-Ñid Med-pahi dNos-Med-na/

④相は何處にか轉せらるべ<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ず、  
/mTshan-Ñid Gañ-du hJug-par-ñGyur//

無相の存在なくば、今かの相は何處にか轉せらるべき。沙中に穀物の(生ぜざるが)如し。

①、②の二句は偈文中に略されており、仍て長行中の③、④の二句を以て補入せり。

復又曰、二者の如きに於ても亦相は轉すべからず、云何に然るや。釋して曰、

③「無相に於ても相は轉すべからず、」  
//mTshan-Ñid Med-la mTshan-Ñid-ni/

有相に於ても轉せず、  
/Mi-ñJug mTshan-Ñid bCas-la Min/

有相と、無相とより

/mTshan-bCas mTshan-Nid Med-pa las/

餘に於ても轉ずべからず。」

/gShan-lahan hJug-par Mi-hGyur-Ro//

「有相、無相中、無相に於ても、有相に

//Na-alaksane laksanaṣya

相則無所住、於ても、相の轉じて、

pravittir na salaksane/

離有相、無相、有相と、無相とより、

salaksana alaksanābhyāni

餘處亦不住。」外にも轉ずることなし。」

nāpy anyatra pravartate// (p. 130)

/Bei einem Kennzeichenlosen wird das Kennzeichen nicht angewendet, nicht bei einem mit

Kennzeichen Verschenen/

Bei einem andern auch als Kennzeichenlosen und mit Kennzeichen Verschenem wird es nicht

angewendet/ (p. 28)

且く有相の義に於て相は轉せず。何故に然るや。若し有相ならば、そは何ぞ相は轉せらるを要す  
べきや。若し有相に於て、また相の轉し得べくば、相は二種に墮すべし。(一)あらゆる相を以て  
相に轉せらるゝものと、(二)そはまた相を轉せらる總てのものなり。無相の義に於ても亦相は轉せ  
ず、總ての義中に轉せらる彼相の總てのものなり。何が故に然るや。此に象の相は牙を有し、一鼻  
を垂れ、下唇は蠣殻の相に似たり。頭は三頭蓋にて飾られ、耳は箕に似たり。背は弓の如く曲り、

胸は擴がり、腹部は大にして、尾尖は短く、(原 文)手足は肥滿し、四個の圓きものを有せり。是を除かば、何處にか象の相は轉(定置)せらるべきぞ。

かの象とは今何ぞや、馬の相も亦是の如し。面は長く、耳は吼ありて高く、鬣あり、手足蹄は同一のもの四(支)を有し、尾は根元より生えてあり。それ等を除けば、何處にか馬の相を轉し得べき。かの馬とは今何ぞや。有相も亦相は轉置すべからざるが故に、無相中にも亦相は轉すべからず。有相と、無相とより餘の何處に於てか相を定め得べきぞ。第三者の相はなし。是の如く全く觀察するに、二者の如きも亦相は轉すべからざればなり。

(4)「相が轉することあらざることを、

所相は認むべからず、

//mTshan-Nid hJug-pa ma-Yin-na/

所相が認められざることを、

/mTshan-gShi hThad-par mi-hGpur-Ro/

相はまた有ることなし。』

/mTshan-gShi hThad-par ma-Yin-na/

「相法無有故、

「相が轉ばざることを、

//Iakṣaṇa asaṇipravṛittau ca

可相法亦無

所相は生ざるなり、

na lakṣyam upapadyate/

可相法無故

而して所相が生ざることを、

lakṣyasya anupapattau ca

相法亦復無」。

lakṣaṇasya-apy asaṅbhavaḥ // (p. 311)

/Wenn das Kennzeichen nicht herantritt (angewendet wird), so trifft das Gekennzeichnete nicht

zu; Wenn das Gekennzeichnete nicht zutrifft, existiert auch nicht das Kennzeichen/ (p. 29)

何故ぞ全く觀察するに、二者の如きも亦轉ずることあらざれば、所相は認むべからず、所相の認むべからざることを、相も亦有ることなし。

① 所相の語原 mTshan-gShi は根本相、又は事相、梵語 lakṣyaṣya 正「相せらるるもの」の譯義、漢譯可相。

③ 「この故に所相も有ることなし」。

//De-phyir mTshan-gShi Yod-Min-Te/

相も有ることなし、

/mTshan-Nid Yod-pa-Nid ma-Yin/

所相と相とを除けば、

/mTshan-gShi mTshan-Nid Ma-g'Togs-pahi/

また存在も有ることなし」。

/dños-pa Yan-ni Yod-ma-Yin//

「是故今無相 「この故に所相も有らず、

//Tasmān na vidyate lakṣyaṅ //

亦無有可相、

相も決してあることなし、

lakṣaṇaṅ naiva vidyate/ (p. 131)

離相可相已

所相と、相とを離れては、

lakṣya-lakṣaṇa nirmuḥto

更亦無有物」。

決して存在は見えられず」。

naiva bhāvo'pi vidyate// (p. 132)

/ Deshalb existiert nicht das Gekezeichnete, das Kennzeichen existiert eben nicht.

Frei von Gekezeichnetem und Kennzeichen existiert auch nicht ein Ding (bhāva) / (p. 30)

「この故に」と云ふは、語尾の結搦なり。何が故ぞ正しく先きに與へて全く觀察するに、一切種にて所相は認むることなし、所相の認むることあらざるとき、相も亦有ることなし、其(相)を除けば存も有ることなし、瓶は自性(Nō-Bo-Nid)より異なるが如し。

① 「存在」(dNos-po, bhāva)、漢譯物、又法、事。

此に曰(以<sub>上</sub>下<sub>下</sub>)「若し存在なくば、ならば無存在は有るべし。此に釋して曰く、

⑥ 「存在が有らざるとき、

// dNos-po Yod-pa Ma-Yin-Na/

何ものの無存在があり得べき、

/ dNos-Med Gan-gi Yin-par-Gyur/

「若し無有有

「存在が存せざるとき、

// Avidyamāne bhāve ca

云何當有無」。

何もの、非存在が存すべき、

Kasya-abhāvo bhaviṣyati/

/ Wenn Sein nicht ist, wessen Nichtsein wird sein? (p. 30)

此に存在を能く成立すれば、また無存在も認めらるゝも、完全に分別すれば、かの存在はなし。かれ有らざるとき、今かの何ものゝ無存在があり得べき、兔の角の如し。

此に問て曰、誰か存在と、それらの無存在とを能く識りつゝ完全に分別するもの有るへし、此に釋して曰、

「存在と、無存在とは不相應<sup>①</sup>の法なり、

誰によりて存在と、無存在とを知るや」。

「有無既已無、  
[存在と、非存在とは不(同)法と  
する  
bhāva abhāva vidharmā ca

知有無者誰。」  
誰によつて存在と、非存在とを  
知るや」。

/Wer, von Sein und Nichtsein verschieden, erkennt sein und Nichtsein? (p. 30)

汝はかの存在と、無存在とを了別する其の總てのものに執着するも、かの存在と、無存在との其等の不相應の法は是れなりと、誰によりて示し能ふべからや。

① 不相應法、梵 vidharmā. 異法、難法、Wallerster は Verschieden (相異)

⑦「この故に虚空は存在に非ず、

無存在に非ず、所相<sup>①</sup>に非ず、

相に非ず、他の其等の五界も、  
//De-Phyir Nann-mkhalj dNos-po-Min/  
/dNos-Med Ma-Yin mTshan-g-Shi-Min/  
/mTshan-Nid Ma-Yin Khams-Tria-po/



また虚空に等し。」

/gSham Gai-Dag Kyai Nam-nkhah hTshuns

「是故知虚空、

「それ故に虚空は、存在に非ず、

//Tasman na-bhavo na-bhavo

非有、亦非無、

非存在に非ず、所相に非ず、

na laksyani napi laksanani/

非相、非可相、

能相に非ず、他の五界も、

akācaṇi akācasamā

餘五同虚空。」

虚空に同じ」

dhātavaḥ pañca ye pare// (p. 134)

/Deshalb ist der Raum (ākāśa) nicht Sein (bhāva), nicht Nichtsein, nicht Gekennzeichnetes, Nicht Kennzeichen. Die anderen fünf Elemente (Dhātu) auch sind dem Raume gleich// (p. 31)

この故に全く觀察するに、虚空はまた存在に非ず、また無存在にも非ず、また所相にも非ず、また相にも非ず。云何にかの虚空の如く、又其等のあらゆる餘の五界を見るべきなり。

① 「所相」、原文 mTshan-gShi (根本相、事相)、Wallerse G Gekennzeichnetes, 漢譯可相。

⑧ 「彼等小智者は、諸存在に於て、

//Bio-Chuin Gai-Dag dNos-Rnams-la

有と、無とを、

/Yod-pa-Nid Dai Med-Nid-du/

かの見に由て見る(斯る)ものは、

/Lta-ba Des-ni bIra-Bya-ba/

寂靜なる寂滅を見ず。」

/Ne-bar-Shi-ba Shi Mi-nThon//

「淺智見諸法、」

「これに諸の存在の、」  
//Astivain ye tu paçyanti

若有若無相、

有と、無とな、

nāstivain ca-alpapubuddhyah/

是則不能見

見るところの小智者は、

Bhāvānāhi te na paçyanti

滅見安穩法」。

寂靜なる寂滅の可見を見ず」。

draṣṭavya-upaçaṁain gīvāin// (p. 135)

/Die Geringverständigen, welche in den Dingen (Bhāva) Sein und Nichtsein.

Sehen, sehen nicht das stille Erlöschen des Sichtbaren/ (p.31)

彼等小智者は、諸の存在を(見るに)、有 (Yod-pa-ñid, astivain) 又、無 (Med-pa-ñid, nāstivain) 又の其等の見によりて見れども、涅槃の寂靜にして、寂滅なるを見ざるなり。(p.31)盲目者の如し。

阿闍梨耶、聖龍樹の造、「根本中(論)無畏疏」中、「觀界」と名けらるる第五品なら (khams-hRtag-pa

Shes-Bya-ba-She Rab-tu-Byed-pa I na-paho)

「觀 染 染 者 品」 第 六 (Rāga rakta-parikṣā)

此に問て曰、<sup>(以下原文 p. 49b)</sup>一切法は有るなり。貪欲と、貪者とを施設すればなり。此に釋して曰、

①「若し貪欲の先<sup>あり</sup>に、

//Gal-te hDod-Chags Sna-Rol-na/

貪欲なくして貪(者)あらば、

/hDod-Chags Med-pahi Chags Yod-Na/

それを縁として貪欲あり、

/De-la bRten-Nas hDod-Chags Yod/

貪(者)あれば、貪欲あるべし。

/Chags Yod hDod-Chags Yod-par hgyur//

「若離於染法、

「若し貪より先かに、

//Rāgād yadi bhavet pūrvam

先自有染者、

貪を離れて貪者あらば、

rakto rāga-tiraskṛitah/

因是染欲者、

その貪者を縁として貪生じ、

tañ pratītya bhaved rāgo

應生於染法」

貪者あるにまつて貪生ずべし。

rakto rāgo bhavet satī// (p. 138)

/Wenn vor der Leidenschaft der Leidenschaftliche ohne Leidenschaft existierte,

So wäre von dem die Leidenschaft abhängig; wenn der Leidenschaftliche wäre, wäre Leiden-

schaft/ (p. 32)

若し此に貪欲の先きに、貪欲なくして貪者存すれば、それに縁りて貪欲もまた有るべし。是の如く貪者有るとき、貪欲有ればなり。

① 貪欲 (hDod-Chags) 梵 Rāga (染める、愛著する) は、語根 Rañ (染まる) より來れる名詞染を意味す。藏譯は之を貪欲、愛欲の意に譯出した。梵 Rakta (染者) は 2 回の過去受動分詞にして、

煩惱の主體を意味す。

② ③ ヲレザ一氏は hDod-Chags を情、Chags-pa を激情と譯した。

そは是れを思惟するに、貪者存せば貪欲存するや。此に釋して曰、

②「貪者の有らざるとき、

//Chags-pa Yod-par Ma-Gyur-Na/

貪欲は何處にか有らん」。

//hDod-Chags Yod-par Ga-la-hGyur/

「若無有染者、復貪者の存せざるとき、

//Rakte'sati punā rāgaḥ

云何當有染」。貪は何處にか有らんや」。

kuta eva bhaviṣyati/ (p. 138)

/Wenn auch der Leidenschaftliche ist, wie (eig, wo) wird denn die Leidenschaft sein?

又貪者の有らざるとき、貪欲は何處にか存せん。

① 原文 Gyur-na-Yan 今本偈と、月稱譯に依て Ma-Gyur-na と訂正した。蓋し梵文と一致せり。獨譯は原文のまゝに譯出せり。

② 原文は①と同じ、今は①と同様に訂正せり、本偈には此の(2)の偈文は四句一頌となれり、今此處では二句づつ前後を分註せり。

「貪者に於ては、又貪欲は、

/Chags-pa-la Yan hDod-Chags-ni/

有、若は無も、亦次第は同じ」。

/Yod-Dam Med kyau Rim-pa mTshams//

「若有若無染、貪の有若は無に於て、

/Sati vā-asati vā rāge

染者亦如是」。貪者に於てまた此次第は同じ」。

rakte'py eṣa samah kramah// (p. 39)

/ Auch beim Leidenschaftlichen, wenn Leidenschaft ist oder nicht ist, ist derselbe Vorgang  
(Krama, Methsde) / (p. 32).

貪者に於ては、又貪欲の有・若は無も亦可なり。其者と次第に同じと考へらる。父と子との如し。

又復

「若し貪者の先きに、

貪(者)なくして、貪欲有らば、

それを縁として貪者有り、

貪欲有るとき、貪(者)あるべし。」

//Gar-te Chags-pahi Sia-Rol-na/

/Chags-Med hDog-Chags Yod-na-Ni/

/De-la hRten-nas Chags-pa Yod/

//hDod-Chags Yod-na Chags Yod hGyur//

若し此に貪者の先きに、貪者なくして貪欲有らば、それを縁として又貪者は有るべし。是の如く貪欲有るとき、貪者有ればなり。

此の中、是れを思惟するに、貪欲有るとき、貪者ありや、此に釋して曰、

①「貪欲有らざるごとや、

③ //hDod-Chag Yod-pa ma-Gyur-na/

貪者は何處にか有らん。」

/Chags-pa Yod-par Ga-la-hGyur/

④ 貪欲の有らざるとき、貪者は何處にか有らせん。

③「貪者に於て、又貪者

/hDod-Chags-la Yai Chags-pa-Ni/

有、若は無も、亦次第は同じ」

/Yod-Dam Med Kyai Rim-pa mTshaus//

貪欲に於て、又貪者は有、若は無と亦可なり。其者の次第は同じと考へらる。父と子との如し。

①と②の偈文は前(二)の偈文と同一にして重複なり。Waller 氏も是れと同項の譯あり、少しく文句を前と異にせるのみ。

③と④とは、前(二)の偈文の第一句梵文に依つて訂正す、藏文 Gyur-na-Yai を今は ma-Gyur-na と訂せり。

此に問て曰、貪欲と、貪者とは次第に生ずとは認むべからず、また其等は俱(合)に生ずなり。此に釋して曰、

③「貪欲と、貪者とは、

//hDod-Chags Dan-ni Chags-pa-Dag/

俱(合)に於て生ずるは正しからず、

/Ihan-Cig-Nid-du Skye Mi-Rigs/

②是の如く貪欲と、貪者とは、

/hDi-I-tar hDod-Chags Chags-pa Dag/

相互に關係なかるべし。」

/Phan-Tshun hLtos-pa Med-par-hGyur//

「染者及染法、

//Sahaiva punar udbhūtir

俱成則不然、

na yukta rāga raktayoh/

染者染法俱、

何となれば貪と、貪者とは、

bhavetan rāga raktan hi

則無有相待。」

相互に關係せねばなり」

nirapeksau parasparan// (p. 139)

/Zusammen- (gleichzeitiges) Entstehen von Lei Leidenschaft und Leidenschaftlichen ist nicht richtig.

So würden Leidenschaft und Leidenschaftlicher unabhängig voneinander sein./ (p. 33)

貪欲と、貪者等とは俱生すと認むべからず、此に是れを思惟するに、俱生ならば、何の過失となるや。此に釋すべし。

「是の如く貪欲と、貪者とは、

/hDi-Ltar hDod-Chags Chags-pa-Dag/

相互に關係することなかるべし」

/Phan-Tshun hLtos-pa Med-par-hGyur//

俱生するならば、是の如く貪欲と、貪者とは相互に關係なかるべし。是の如く、彼の兩者は常性に墮すべし、常ならば大過失のみとなるべし。牛角の如し。

①と② 原文偈は前二句のみにて、後二句は長行中に記入されてゐるも、今は本偈と、譯  
とに依て偈文四句を一緒に同記せり。

又復

貪欲と、貪者の其等は俱にあらば、同一か異別かになるべしと計量すとも、兩者の如きは亦認む

べからず。

云何に云ふや、釋して曰、

(4) (同) 一は俱(合)なし、

//gCig-Ñid Ihan-Cig-Ñid Med-De/

彼自身は彼と俱(合)なし、

/De-Ñid De-Dai Ihan-Cig-Min/

若し別異なることあり、

/Ci-Ste Tha-Dad-Ñid Yin-Na/

如何に俱(合)になるや。」

/Ihan-Cig-Ñid-du Ji-I-tar-ḥGyur//

「染者、染法一、 「同一なることに於て俱合なし、

//Na-ekatve sahabhāvo 'sti (p. 139)

一法云何合、

何となれば、彼は彼自身と俱  
合せざるが故に、

na tenaiva hi tat saha/

染者、染法異、

若し別異なるものに於て、

Pyithakṭve sahabhāvō'ṭha

異法、云何合。」

俱合は何處にか發生すべし。」

kuta eva bhaviṣyati// (p. 140)

/(Bei) Einheit ist nicht Zusammensein (Gleichzeitigkeit) ; (denn) dreses ist nicht mit diesen

Zusammen (gleichzeitig).

Wenn aber Getrenntheit (Verschiedenheit) ist, wei sollte Zusammensein (Gleichzeitigkeit) sein?

(p. 33)

同一ならば俱(合)は認むべからず。何故に言ふや、彼自身は彼と俱(合)には認むべからざればなり。



若し別異ならば、又如何に俱(合)になるや。何の故に然るや、別異あればなり。

又復

(5)「若し單獨にして俱(合)あらば、

//Gar-te gCig-Bu lhan-Cig-Na/

伴者なくして又其れとなるべし、

/Grog-s-Med-par Yan Der hGyur-Ro/

若し別異にして俱(合)あらば、

/Gal-te Tha-Dad lhan-Cig-Na/

伴者なくして又其れとなるべし。」

/Grog-s Med-par Yan Der-hGyur-Ro//

「若一有合著、

「若し同一に於て、俱合あらば、

//Eka-tve sahabhāvaḥ cet

離伴應有合、

そは伴者を離れて存すべし、

syāt saḥāyain vināpi sah/

若異有合者、

若し別異に於て、俱合あらば、

Prithaktve sahabhāvaḥ cet

離伴亦應合。」

そは亦伴者を離れて存すべし。」

syāt saḥāyain vināpi sah// (p. 140)

/Wenn Eines zusammen (gleichzeitig) wäre, so wäre es auch ohne Genossen ;

Wenn Getrenntes (Verschiedenes) zusammen gleichzeitig) wäre, so wäre es so auch ohne

Genossen / (p. 34)

若し單獨に於て俱(合)を觀するとき、伴者なくして又其れとなるべし。若し又別異に於て、俱(合)

を觀せば、伴者なくして又俱(合)の其れになるべし。

(6)「若し別異に俱(合)あらば、

貪欲と貪者とに何ぞ(俱合)あらん、

//Gar-te Tha-Dad Lhan-Cig-Na/

/hDod-Chags Chags-pa Ci-Shig-Yin/

別異性の成就せしとき、

/Tha-Dad-Nid-du Grub-Gyur-na/

それによて彼の二は俱(合)となるべし」。

/Des-na De-gÑis Lhan-Cig-hGyur//

「若異而有合、」若し別異に於て俱合あらば、

//Prithakve sahabhā va-c ca

染業者何事、

貪と、貪者とに於て何ぞ(俱合)あらん、

/Yadi kim rāga raktayoh/

是二相、先異、

何故ならば、各々の別異性の成ずるとき、

Siddhah prithak prithag bhāvah

然後説合相。」彼の二の俱合あるが故に」

/Sahabhāvo yatas tayoh//

/Wenn Getrenntes (Verschiedenes) zusammen ist, was (sind) Leidenschaft und Leidenschaft-

licher?

/Wenn Getrentheit (Verschiedenheit) erreicht wird, dann wären sie beide zusammen/ (p. 34)

若し別異性に俱(合)を觀せば、貪欲と、貪者とに於て何ぞ(俱合)成せん、それらを別異なりと觀すれども、俱(合)性を成すべからず。斯くの如くならば、別異を成するとき、かの二は俱(合)なり

と観することあるべし。

(7) 「若し貪欲と、貪者とに、

別異が成し得るならば、

其等の俱(合)に於て、

何の爲めに全く分別するや」。

「若染及染者、」或は若し貪と、貪者とに於て、

先各成異相

其等の別異性が成するならば、

既已成異相、

何が爲めに汝は、

云何而言合」。

兩者の俱舍を分別するや」。

/Wenn Getrennheit (Verschiedenheit) von Leikenschaft und Leidenschaftlichem feststellt

wird,

Weshalb werden diese (von dir) als zusammen seind angenommen/ (p. 34)

若し貪欲と貪者とに別異が成しうるならば、今其等の俱(合)に於て何の爲めに全く觀せしむるや。

(8) 「別異は成せざるが故に、

それが爲めに俱(合)を欲す、

俱(合)を能く成せんが爲めに、

又別異を欲するや。」

//Tha-Dad Grub-par Ma-Gyur-pas/

/De-Phyir Lhan-Cig hDod-Byed Dam/

/Lhan-Cig Rab-tu bSgrub-paḥi-Phyir/

/Tha-Dad-Ñid-du Yan hDod-Dam//

「異相無有成、

「別異は成せず、

是故汝欲合、

斯くして汝は俱合を欲す、

合相竟無成、

俱合を成せんが爲めに、

而復説異相。」

汝は更に別異を欲す。」

//Piṭhag na sidhyāṭity evam/

sahabhāvān vikāṅkṣasi/

Sahabhāva-prasiddhyarthān

piṭhaktvān bhūya icchasi// (p. 141)

/Da sie nicht als getrennt (Verschieden) erreicht werden, deshalb wünschst du Zusammensein,

Und, um Zusammensein zu erreichen, wünschst du überdies Getrenntheit./ (p. 34)

貪欲と、貪者とは別異を成せざるが故に、それを能く成就せんが爲めに、俱(合)を欲すれども、俱

(合)も亦成せざるが故に、それを能く成せんが爲めに、又別異を欲することは正しからず。

① 原文 Dam. 本偈と、月稱譯 Na.

(9) 「別異の存在成せざるが故に、

//Tha-Dad dÑos-po Ma-Grub-pas/

俱(合)の存在は成せず、

/Lhan-Cig dÑos-po hGrub Mf-hGyur/ ①

云何なる別異の存在に於て、

/Tha-Dad dÑos-po Gan-Sing-la/ ②

俱(合)の存在を欲するも、

/Lhan-Cig dÑos-par hDod-par-Byed//

「異相不成故、

「別異の成立せざるが故に、

//Pithagbhāva aprasidheç ca

合相則不成、

俱合も成立せず、

sahabhāvo na sidhyati/

於何異相中、

云何なる別異あるに於て、

Katamasmin pithagbhāve

而欲説合相、

汝は(何ぞ)俱合を欲するも、

sababhāvam sati icchasi// (p. 142)

/Weil. Getrenntsein (Verschiedensein) nicht erreicht wird, wird Zusammensein nicht erreicht:

Bei was für einem Getrennt-(Verschieden-) sein wünschest du Zusammensein ?/ (p. 35)

貪欲と、貪者等は別異の存在を成せるが故に、俱(合)の存在も成すべからず。別異の存在は成せずして、云何なる(別異)に於て、俱(合)の存在を欲するも、そは又正しからず。

① 原文 dÑas-po 本偈、月稱譯 dÑos-par

② 原文 Gan-Sing-la 本偈、月稱譯 Gan Yod-Na、今は之れに依る。

(10) 「是の如く、貪欲と、貪者と、

//De-ltar hDod-Chags Chags-pa Dai/

俱(合)と、不俱(合)も成せず、

/Lhan-Cig Lnan-Cig Min Mi-ñGrub/

貪欲の如く、一切諸法は

/hDod-Chags bShin-du Chos-Rnams-kum/

俱(合)も、不俱(合)も成せず」

/Lhan-Cig Lhan-Cig-Min Mi-ñGrub//

「如是染染者、

「是の如くして、貪と俱なるも、

//Evain raktena rāgasyati/

非合不成、

不俱なるも成せず、

siddhir na saha nāsaha/

諸法亦如是、

貪の如く、一切法の成立するも、

rāgavat sarvadharmānān

非合、不成。」

俱なるも、不俱なるもなし。」

siddhir na-maha na-asaha// (p.142)

/so werden Leidenschaft und Leidenschaftlicher als zusammen und als nicht zusammen nicht erreicht.

Wie die Leidenschaft werden alle dharmas als-zusammen und nicht zusammen nicht erreicht./

(p. 35)

是の如く全く観するに、又貪欲と貪者は俱(合)なるも、若は不俱(合)なるも成することを認むべからず、貪欲の如く、一切法は亦俱(合)なるも、若は不俱(合)なるも、成は認むべからず、日蔭の如し。

阿闍梨耶、聖龍樹の造、「根本中(論)無畏疏」中、「貪欲と、貪者とを観すと名けらる第六品なり」。

「觀三相品」第七 (sanskrita-parīkṣā)

此に問て曰、

生と、住と、滅等<sup>③</sup>は有爲の相なりを示すが故に、何が故に是の如くあるや。この故に有爲はあるべ

し。<sup>(以下原文 p.51a,6b)</sup> 此に釋して曰、

べは有 (Yod-pa, asti) に非ず。何の故に然るや。生と、住と、滅等は成せざればなり。其等の生と、住と、滅とは、有爲なり、無爲なりと計量するとも、かの二者の如きは、又其等を認むべからざるが故に成せず。

此に問て曰、若し其等は有爲か、若は無爲なりとせば、是に由て云何なる過失に墜するや。此に釋せり。

①「若し生が有爲ならば、

//Gal-te Skye-ba ñDus-Byas-na/

そこの三相を具すべし、

//De-la mTshan-Ñid gSum-Ldan-ñGyur/

若し生は無爲(ならば)、

//Ci-Ste Skye-ba ñDus Ma-Byas/

云何ぞ有爲の相あらんや。」

//ñi-ltar ñDus-Byas mTshan-Ñid-Yin//

「若生是有爲、」若し生が有爲ならば、

//Yadi sanskrita utpādas

則應有三相、

そこに三相と相應すべし、

tatra yukta trilaksani/ (P.145)

若生は無爲、

若し生が無爲ならば、

atha asanskrita utpadah

何名有爲相。」

云何にして有爲の相あらん。

katham sanskrita laksanani// (P.146)

/Wenn Entstehen gewirkt ist; so ist es mit drei Kennzeichen verbunden.

Indessen ein nicht gewirktes Entstehen; wie ist es Kennzeichen des Gewirkten? (p. 36)

若しもかの生は有爲ならば、そこに三相を具すべし。其等の三相に於て、又他の三相を具するが故に、無窮の過失に達すべし。(以下原文の p. 51 b) 住と、滅等に於てもまた是の如し。

若しかの生は無爲ならば、云何ぞ有爲の相あらんや。生と、住と、滅等なくして、云何ぞ生ありと觀じ能ふや。復生と、住と、滅等なき生は、有爲に非ざるが故に、涅槃に等しく、或は涅槃其者なるべし。(そは)涅槃は有爲の相に非ず、住と、滅等に於ても、亦是の如く觀すべし。

① 生 (utpada, Sīye-ba) / Utpada は「上に昇る」「上に起る」の意義よりして「生ずること」を意味す、所謂潜在的意識が、顯在的意識になる存在 (bhāva, d'nos-po) である。藏語 Sīye-ba はこの意味による現象である。Walleser 氏の Entstehen (生、起る、現はる)

② 住 (shiti, g'nos-pa) / 「止る」と「停止すること」、刹那的現象を意味す。獨譯 Stehen

③ 滅 (bhanga, hje-pa) / 破壞すること、存在即ち壞法を意味す。この字の漢譯「滅」は、四諦中の「滅諦」(nirodha-satyā) の「滅」と同字なれば、常に兩者の相違を混同せしむるの虞れあり。獨



④ 有爲(samskrita, hDus-Byas)「作爲せられたるもの」「積集によつて作爲せられたるもの」との意味、即ち「有爲なるもの」とは、因縁所生の存在を證はす概念である。是れに反するものは「無爲なるもの」(asamskrita)である。獨譯Gewirkten(samskrita)

又復

②「生等の三(相)が別々なるに由て、

有爲相を作すこと、

能はず、又合(一)ならば、

云何ぞ同(處)に同時に可ならん」。

「三相若聚故、

不能有所相、

云何於一處、

一時有三相。」

① //Skye-la-Sogs gSum So-So-Yis/

/hDus-Byas mTshan-Ñid Bya-Bar-Ni/

/Nus-Min hDus-pa Yin-Na Yai/

/gCig-la Dus-gCig Ji-I-tar-Run//

//Utpādāyās trayo vyastā

nālan lakṣaṇa karmāni/

Saṃskṛitasya samastāḥ syur

ekatra katham ekadā// (p.146)

/Die drei, Entstehen usw., getrent, sind nicht instande, Kennzeichen des Gewirkten zu bilden;

Auch wenn sie vereinigt (samasta) sind, wie können sie an einem Ort und zu gleicher Zeit

sein? (p.37)

其等の生と、住と、滅とは別々なるか、若し集合の有爲の相にてあるべしと計量するとも、二者の如きは又認むべからず。何の故に然るや。若し只別々なりと觀するとき、別々に由て有爲の相を作す能はず、有爲の一方は相によつて表示せらるゝも、一方は相の分離に墮するが故に、そは正しからず。

若し又集合なりと觀するとも、其等は相互に相應せざるものを、同時に同處に聚合すべく適當ならんも、そは又不合理なり。火と、水との如し。

①、②、③の偈文は、左の如き本偈と、月稱譯とは多少相違す、但し意味は同じ。而して無畏疏の此の偈文は、梵偈と一致す。

「生等の三(相)が別々なるに由て、

/Skye la-Sogs gSum-So-So Yis/

有爲相を作すこと、

/ḥDus-Byas mTshan-ñid Bya-dar-ni/

能はず、同(時)に由て同(處)に、

/Nus-Min gCig-las Dus-gCig-lu/

云何ぞ又合(一)は可ならん。」

/ḥDus-pa-Yan-Ni Ji-Lar-Rin//

「二十唯識論に曰、「極微與六、一應成六分、若與六同處、聚應如極微。」

又復

③「諸の生と、住と、滅とに於て、

//Skye Dai gNas Dai ḥlig Rnams-la/

他の有爲相が、

/ḥDu-Byas mTshan-ñid gShan-Shig-Ni/

若し存在せば無窮なり、

/Gal-te Yod-na Thug-pa-Med/

無ければ、其等は有爲に非ず。」

/Med-na De-Dag hDus-Byas Min//

「若謂生住滅、

「生、住、滅」とい、

//Utpāda sthiti bhaṅga nām

更有有爲相、

更に有爲相が存せば、

anyat saṅskṛita lakṣaṇān/

是卽爲無窮、

斯くては無窮なり、

asti ced anavasthā evain

無卽非有爲。」

若し無ければ、其等は有爲に非ず」

nāsti cet te na saṅskṛitān// (p. 147)

/Wenn in Entstehen, stehen und Vergehen ein weiteres Kennzeichen von Gewirktem ist, ist

regressus ad infinitum (anavasthā) ;

Wenn es nicht ist, sind sie nicht gewirkt. / (p.37)

若し諸の生と、住と、滅とに於て作られたる他の有爲相ありと謂はゞ、無窮に墮すべし。若し無らば、其等は有爲に非ず、有爲に非ざれば、有爲の相ありとは不合理なり。

此に問て曰、汝の諸の生と、住と、滅とに於て、他の有爲の相あらば、無窮に墮すべしと云へり、その解釋を此に説明すべし。諸の生と、住と、滅とは、また有爲なれども、また無窮に墮せざるべし。云何に然るや。

曰、

(4)「生の生によりて根本の、

或生を生せしむ、

根本の生によりて生の、

生を生せしむるなり」。

//Skye-bahi Skye-bas Rtsa-ba-Yi/

/Skye-ba hBaḥ-Shig Skyed-par-Byed/

/Rtsa-bahi Skye-bas Skye-ba-Yi/

//Skye-bahai Skyed-par Byed-pa-Yin//

「生生之所生、 生の生は只、

生於彼本生、 根本の生の生なり、

本生之所生、 根本の生が更に、

還生於生生。」 生の生を生せしむ」。

/Utpādōtpāda utpādo

mñlotpādasya kevalam/

Utpādōtpādān utpādo

manlo janayate punah// (p.149)

/Durch das Entstehens-Entstehen entsteht nur Ursprungs (eig. Wurzel-) Entstehen;

Durch das ursprungs-Entstehen entsteht ferner das Entstehens-Entstehen. (p.37)

此に於て云何なる法もまた適當なりや。若し生ずるとき、かの自體と共に十五(法)を生ず、かの識、若は受(Vedanā, Tshor-ba)、若は想(Sañjñā, hDu-ces)等の法と、その法の生と、其等の法の住と、その法の滅と、その法の具有(ldan-pa)と、その法の老と、その法の解脱と、若は顛倒の解脱と、その法の出離(Nes-par hByun-ba)と、若は非出離となり。

只生と、住と、滅と、具有と、老と、解脫と、出離と云へる其等は、輪廻なりと云ふべきなり。輪廻の中より、此に解脫の二法(即ち)、解脫と、出離又は顛倒の解脫と、非出離となり。

其等のあらゆる白法は解脫なれども、其等の黒(法)は顛倒の解脫なり。其等のあらゆる出離の法は、其等の出離なれども、其等のあらゆる非出離の法は、非出離なり。今輪廻の諸輪廻は是の如し、生の生と、住の住と、滅の滅と、具有の具有と、老の老と、解脫の解脫と、出離の出離となり。輪廻の諸輪廻の中にて、亦此に二法あり、解脫の解脫と、出離の出離となり。又顛倒解脫の顛倒解脫と、また非出離の非出離とにして、是等の總ての白法は、解脫の解脫なれども、それ等の黒(法)は、顛倒解脫の解脫なり。其等のあらゆる出離の法は、出離の出離なれども、其等のあらゆる非出離の法は、非出離の非出離にして、是の如く十五部なり。

其處にかのあらゆる根本の生に由ては、自體(Dog-zie)を除きて一切十四法を生起す。かのあらゆる生の生に由ては、彼の或根本の生を生起せしむ。彼のあらゆる根本の住は、亦住の住を住せしむれども、住の住は亦根本の住を住せしむ。根本の滅に由ては、亦滅の滅を滅せしむれども、滅の滅に由て、亦根本の滅を滅せしむ。具有と、老と、解脫と、出離等に於ても、亦是の如く見るべきなり。この故に生と、住と、滅とは亦有爲なれど、又無窮の過失に墜せざるなり。住と、滅等に於ても亦是の如く見るべし、種子と、芽との如し。(以下原文)

(5)「若し汝の生の生は、<sup>①</sup>

根本の生を生せしめば、

汝の根本によつて未だ生起せざる其は、

云何にし彼(の根本生)を生せしむるや」

「若謂是生生、」若し汝にまで生々は、

能生於本生、 根本の生(を生せしむる)生ならば、

生生從本生、 根本によりて未だ生起ざる彼(生)が

何能生本生、」 云何にして汝にまで生せしむるや。』

/Wenn bei dir das Entstehens-Entstehen das Ursprungs-Entstehen hervorbringt,

Wie wird bei dir jenes, durch das Ursprungs-Entstehen (noch) nicht hervorgebracht, dieses

hervorbringen ?/ (p.39)

若し汝の生の生に由りて根本の生を生起せしめば、汝の根本の生に由て生起せざる彼の生の生は、  
かの根本の生を云何ぞ生起せしめん。自己其者は未だ生起せざればなり。

① 生の生 (Skye-bahi Skye) 獨譯 Entstehens-Entstehen (起る、生ずる、現はる)

//Gal-te khyod-kyi Skye-bahi-Skyes/  
/Rtsa-bahi Skye-ba Skyed-Byed-Na/  
/khyod-kyi Rtsa-bas ma-bSkyed Des/  
/De-ni Ji-Ltar Skyed-par-Byed//  
//Utpādopāda utpādo

mūlotpādasya te yadi/  
Manlenājanitas tann  
te sa kathan janayisyati// (p.150)

② 生起する (Skyed-par) 獨譯 hervorbringen (出生する、創造する)

若し是れを思惟するに、根本の生に由てのみ生起するところの生の生によりて、根本の生を生起せしむるも、未生起によりては(生起)せずと考ふるや。此に釋すべし。

(6) 「若し汝の根本によりて、

//Gal-te khyod-kyi Rtsa-ba-Yis/

生起せられし彼に由りて根本を生せば、

/bSkyed-pa De-Yis Rtsa bSkyed-Na/

それによりて生起せられざる彼の根本は、

/Des ma-bSkyed-pahi Rtsa-ba Des/

云何ぞそれを生起せしむべし。」

/De-ni Ji-Itar Skyed-par-Byed//

「若謂是本生、

「若し汝根本の生によりて、

//Sa te maulena janito

能生<sub>二</sub>於生々、

生ぜられし彼が、根本の生を生ぜしめば

maulain janayate yadi/

本生從<sub>レ</sub>彼生

根本なる彼が、其によりて未だ生ぜるに

Maulah sa tenājanitas

何能生<sub>二</sub>生生。」

云何にして其を生ぜしむべし。」

tann uṣpādayate kathain// (p.150)

/Wenn bei dir das durch das Ursprüngliche Hervorgebrachte das Ursprüngliche hervorbringt,

wie wird das durch jenes (noch) nicht hervorgebrachte Ursprüngliche Jenes hervorbringen? (p. 39)

若し汝の根本の生によりて生起する彼の生の生は、かの根本の生を生起せしめば、かの生の生は、

かの未生起の根本の生は、かの生の生を云何ぞ生起せん。自己其者を生ぜざればなり。是の如きが故に此の觀察によりても尙能はざるが故に、自性 (svabhāva, No-bo-Nid) によつても成ずることなし。

此に問て曰、根本の生は生じつゝあるものによつて生の生を生起 (Skyed-pa) せしむるも、未生によつては (生起) せしめず。此に釋して曰。

(7) 「汝は是れが生じつゝある (とち)」、  
// Khyod-kyi De-ni Skye-bShin-pa/

かの未生によりて若し、  
/Ma-Skyes De-Yis Gar-te-Ni/

それを生起せしめ能ふならば、  
/De-ni Skyed-par-Byed Nus-Na/

其を生起せしむることは望みに屬す。」  
/De-bSkyed-par-ni hDod-la-Rag//

(a) 「若生<sub>二</sub>生<sub>一</sub>生時、」 「汝にまで生じつゝある彼は、  
//Ayam utpādyamānas te

能生<sub>二</sub>於<sub>一</sub>本生、」 望みの如く、是れを生ぜしむべし  
kāman utpādyed imam/

生<sub>二</sub>生<sub>一</sub>尙未<sub>二</sub>有<sub>一</sub>、」 若し未だ生ぜしめざる彼が、  
Yadi imam utpādayitum

何能生<sub>二</sub>本生<sub>一</sub>。」 是れを生ぜしめ能ふならば。」  
ajātah caknujād ayam// (p.150)

(b) 「若本生<sub>二</sub>生<sub>一</sub>時、」 註、漢譯の此の二偈は、梵文一句の意味を敷衍したものであり、



能生於生生。

本生尙未有、

何能生<sub>二</sub>生<sub>一</sub>生。」

この藏文は梵文と一致すれど、多少相違あり、下の註に掲ぐる本偈と、月稱譯とは、梵偈と一致す。

/Wenn bei dir das (jetzt) Entstehende durch jenes (noch) nicht Entstandene,

Hervorgebracht werden kann, so möge es nach deinem Wunsche hervorgebracht werden./ (p.39)

汝の根本の生はそれを生じつゝ、自己其者を生せず、是に由て若し、その他の生の生を生起せしめ能ふならば、かの生の生を生起せしむべく望みに屬すること能はず。この故に汝の根本の生の生は、それを生じつゝ、自己其者を生せず、是に由てその他の生の生を生起せしむる能はず。

又是を他の觀察を(以て)せば、汝の生の生は、それを生じつゝ、自己其者を生せず、是れに由て若し根本の他の生をして、生起せしめ能ふならば、かの根本の生を生起せしむべく望みを屬する能はず。(以下原文)此の故に汝の生の生は、それを生じつゝ、自己其者を生せず、此の故にかの根本の他の生を生起せしむる能はず。

何の故に生じつゝ、自己其者は生せずと云ふや。「生じつゝ」あるものは、全く成立せざればなり。此にかの生じつゝあるによつて、彼を生せしむると云ふ、是の總ての説明は正しからず。壊者と不壊者との如し。

① この第七偈は、本偈と、月稱との兩譯の原文と多少相違す。本偈は無畏疏中よりの抄出に非ずして、本偈は以前に單本として世に行はれてありしものであらう、然らずば本偈は抄本として行はるゝ間に於て轉寫せられたものであらうか、左に本偈と月稱との兩譯一致せる原文を出す。

「若しかの未生によつて、

それを生起せしめ能ふならば、

汝の生じつゝそれによつて、

それを生起せしむることは望みに屬す。」

//gar-te Ma-Skyes-pa De-Yis/

/De-Skyed-par-ni Byed-Nus-na/

/khyod-kyi Skye-bShin-pa De-Yis/

/De-bSkyed-pa-ni hDod-la-Rag//

(8)「云何に燈が自と他とを

照らす、その如く、

生もまた自と、他との存在の、

兩者を生起せしむるなり。」

//ji-ltar Mar-Me Rai Dai gShan/

/Shan-bar Byed-pa De-bShin-du/

/Skye-bahai Rai Dai gShan-Gyi dNos/

/gNi-ga Skyed-par Byed-pa-Yin//

「如燈能自照、 燈が自と、他我とを、

亦能照於彼、 照らす如く、斯の如く、

生法亦如是、 自と、他我との、

自生亦生彼。」 兩者を生ぜしむ。」

//Praḍipah sva para-ānmanau

sauṃprakācayitā yathā/

Utpādaḥ svaparātmānāu

ubhāv utpādayet tathā// (p.45r)

/Wie das Licht sich selbst und auch anderes beleuchtet (eig. erscheinen macht), so

Erzeugt auch das Entstehen beides, sich selbst und anderes/ (p.40)

云何に燈は自と、他との兩者の存在を照らす如く、生も亦自と、他との兩者の存在を生起せしむるなり。

此に釋して曰、

⑨「あらゆる燈の中にも、

Mar-Me Dan-ni Gani-Dag-na/

その(燈)のあるところにも闇はなし、

/De-h-Dug-pa-na Mun-pa-Med/

燈は何を照らしなすや、

/Mar-Mes Ci-Shig Snan-bar-Byed/

闇を破するが故に照らしなすなり」。

/Mun-pa Sel-bas Snan-Byed-Yin//

「燈中自無闇

「燈の中にも又、

//Pradipe na andhakār'o'sti

住處亦無闇

その存するところにも闇はなし、

/yatra ca asau pratiṣṭhitaḥ/

破闇乃名照

燈は何を照らすや、

Kiñ prakāṣayati dipaḥ

無闇則無照」

照らすことは闇を破るが故に」

prakāṣo hi tamovadhātḥ// (p.151)

/In dem Licht und wo es sich befindet, ist nicht Finsternis.

Was wird durch das Licht beleuchtet? (denn) durch das Vernichten (eig. Entfernen, Zerstreuen) der Finsternis ist Beleuchten./ (p.40)

此に燈中にまた闇なきが故に、何處にても彼の燈のあるところには闇はなし、常に燈中にはまた闇なきが故に、又何處にても彼の燈のあるところには闇はなし。その時、今燈は自と、他との存在の何れを照らしなすや。

「闇を破るが故に照らしなすなり」と云ふ、「闇を破る」とは、そは又何が故とならば、燈は自と、他との存在を(照ら)しなす、それ故に燈は、自の存在をも亦照らすことあらざるが故に、他の存在も亦照らすことあらず。猫に於ける鼠の如し。

此に問て曰、何が故に、燈は生じつゝあることによつて闇を破る。この故に燈は何處に於ても、かの燈のあるところには闇はなし。此に釋して曰、

<sup>(10)</sup>「云何ぞ生じつゝある燈によつて、 //Ji-I-tar Mar-Me Skye-bShin-pas/

闇を破らしむることあるや //Mun-pa Sel-bar Byed-pa-Yin/

常に生じつゝ燈は、 //Gan-Tshe Mar-Me Skye-bShin-pa/

闇と會合することなし。』 //Mun-pa Dai-ni Phrad-pa-Med//

「云何燈生時、」

//katham utpadyamānena

而能破<sub>二</sub>於闍、

云何ぞ闍を破るハキ、

pradipena tanno katam/

此燈初生時、

生じしある燈は、

Na-utpadya māno hi tamah

不能<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>於闍、

闍に達せらるるハキナシ。

prāḍipah prāpūte yadā// (p. 152)

/Wie zerstreut das entstehende Licht die Finsternis,

Wenn das entstehende Licht und Finsternis sich nicht erreichen ?/ (p. 41)

云何ぞ生じしある燈によつて、闍を破することあるハキ、常に生じしある燈は、その時に於て闍と會合することなければなり。(p. 54 a)

① 會合する (phrad-par)、梵譯達する。獨譯 erreichen(達する)。

又復

(11)「又燈は會合することなくして、

//Mar-Me Phrad-pa Med-pa Yan/

若し闍を破るならば、

/Gal-te Mun-pa Sel-Byed-na/

全世界に住する闍を、

/h'jig-Rten kun-na <sup>①</sup>g'Nas-pahi Mun/

此にある彼(燈)によりて破らるハキ。

/h-Di-na h'Dug-pa Des bSal-h'Gyar//

「燈若未及闇」

「或は若し違はすして、

// Aprāpyaiva pradīpena

而能破闇者、

燈によつて闇が破られなば、

yadi vā nihataim tannāḥ/

燈生於此闇、

此處に在る燈は、

ihaśtāḥ sarvalokasthāni

則破一切闇」

一切世間の破を彼は破るべし」。

sa tanno nihaṇisyati // (p.153)

/Wenn das Licht auch ohne Erreichen die Finsternis zerstreut,

So wird das hier befindliche die in der ganzen Welt vorhandene Finsternis zerstreuen. / (p. 41)

云何にして又是れを思惟するに、燈は(闇)と會合することなくして、又闇を破るべしと考ふるならば、これを釋すべし。

若し又燈は(闇)と會合することなくして、闇を破り作さば、全世界に住する闇もまた、かの燈が此に在ることによつて破らるべし。會合なくも同じきならば、生じつゝある燈によりて、此に在る闇は破らるゝが故に、全世界に住する闇を破らざるとに、何の差別かあらん。この故に生じつゝ闇と會合なきが故に、闇を破らさず。

① 原文 kun-Na. 本偈と月稱譯 kun-la.

又復

(12) 「燈は自と、他との存在を、

若し照らしなるとば、

闇も亦自と、他との存在を、

覆ふべしは疑ひなす」。

//Mar-Me Raii Daii gShan-Gyi dNos/

/Gar-te Snai-bar Byed-Gyur-Na/

/Min-pahaii Raii Daii gShan-gyi dNos/

/Sgrib-par hGyur-bar The-Tshom-Med//

「若燈能自照、若し燈が自と、他我とな、

//Pradipah sva para-timānan

亦能照於彼、

照らすとせば、

sainprakācayate yadi/

闇亦應自闇、

闇もまた、疑ひもな、

tamo'pi svapara-timānan

亦能闇於彼。」

自(我)と、他我とな覆ふべし」。

chādayisyaty asainçayam// (p. 154)

/Wenn ein Licht sich selbst und anderes beleuchtet,

So wird auch ohne Zweifel die Finsternis sich selbst und anderes verhüllen./ (p. 41)

若し燈が自と、他との存在を照らすことありと考へば、斯くては燈の(闇と)不相應の分となり、闇もまた自と、他との存在を覆ふべきは疑ひもなし。闇に由て自の存在を覆はゞ、闇は縁すべからず、常に諸存在を照らす故に、これは(理として)謂ふべからず。

若し燈の不相應の分となりて、闇は自と、他との存在を覆はずば、さらば燈は伴者として自と、

他との存在の兩者を照らすべしと總ては言へり、それは不合理なり。是の如く只譬を除くべし。今は此の義を汝の燈の譬を以て表示するに、生によりて自と、他との存在を生起せしむると云ふ、其れを釋すべし。

(13) 「此の生は、未だ生起せざれば、

//Skye-ha hi-Di-ni ma-Skyes-pas/

云何にして自我は生せしむべき、

/Rai-gi bDag-Nid Ji-I-tar bSkyed/

若し已生によりて(自我を)生起せしめば

/Ji-I-tar Skyes-pas Skyed-Byed-<sup>①</sup>Na/

已生に於て何を生起することあらん。」

/Skyes-na Ci-Shig bSkyed-du Yod//

「此生若未生、

「未だ生ぜざる此の生は、

//Anutpanno'yam utpādahi

云何能自生、

自我を云何にして生ぜしむべき、

svātūnānain janayet kathānū/

若生已自生

若し已生にして(自我を)生ぜしめば、

atha utpanno janayate

生已何用生。」

已生にして何を更に生ぜん。」

jāte kiñ janayate punahū// (p. 157)

/Wie sollte dieses (noch) nicht entstanden Entstehen sich selbst hervorbringen?

Wenn aber das Entstandene entsteht, was ist im Entstandenen zu entstehen? (p. 42)

此のあらゆる生は、自の我性(Rai-gi bDag-Nid)を生ぜしめば、已生か若は未生は生ずべしと計量すとも、若し只「未生によりて」は、自の我性を生起せしめず、「未生」は無性(Med-pa-Nid)なるが故



に、彼の「無」によつて自の我性を云何ぞ生起せん。若し已生によりて生起せしむべしと考ふとも、そは又不合理なり。常に其を生せば、生已了なるが故に、かの已生了に於て、又何を生起することあらん、已生了に於ては生起せらるものなし、已作中には亦作なきなり。

是の如く此の生は已生によつて、自我を生起せしむるが、若は未生によつて生起せしむと計量するとも、二者の如きは亦生起せず、この故に生によつて自我を生起せしめざるが故に、それは已生によりて自の存在を生起すと總ては言へり、そは不合理なり。住と、滅等に於けるも亦是の如く觀察すべし。

① 原文 Ji-Luar. 本偈と、月稱譯 Ci-Ske.

(14) 「已生と、未生と、現生とは、

云何にしても又生起せず、

已去と。未去と。往とによりては

其等は詳しく釋せられたり。」

「生非生、已生、」 「現生なし、已去なし、未生なし、

亦非未生生」

云何にしても生することなし、

//Skyes Dai Ma-Skyes Skye-bShiin-pa/

//Ji-I-ta-Bur Yai Skyed-Mi-Byed/ ①

② //Soin Dai Ma-Soin bTrom-pa-Yis/

③ //De-Dag' Rnam-par bCad-pa-Yin//

//Na-utpadyamāyāni na-utpannāni

na-anutpannāni Kathāni cana/

生時亦不生、  
是の如きは往と、已去と未去、  
を以て

utpadyate tathā-ākhyātam

去來中已答。」 已に答へられてあり」

ganyamāna gata agataih// (p.157)

/Wie auch das Entstandene, das (noch) nicht Entstandene, das Entstehende nicht bestehen,

Das ist durch das Gegangene, das (noch) nicht Gegangene, das Gehende erklärt./ (p. 42)

① ② ③ 此の第十四偈原文は、本偈と月稱とに對比して左の如く相違あり。

「已生と、未生と、現生とは、  
//Slyes Dan Ma-Slyes Slye-bShin-pa/

云何にしても、又生起せず、  
/Ii-La-bur Yan Mi-bSnyed-pa/

其によつて已去と、未去と、  
/Des-ni Son Dan Ma-Son Dan/

往とによつて、詳しく釋されたり」  
/bGom-pas Rnam-par bGad-pa-Yin//

生によつて他を生起せしむるならば、已生と、未生と、現生(Skye-bShin-pa, 生ごつゝあるもの)を生起せしむと計量すとも、

觀察すれば、又三種部を生起せしめず。云何を生起せしめざるか、是の如く已去(agata)と、未去(agata)と、往(bGom-pa, ganyamāna)とを以て詳釋し了れり。そは又云何に然るや、釋して曰、

只存在は已生(Skye-pa)を生せしめず。何の故に然るや。無窮に墮すればなり。已所作中には所作なければなり。云何なる存在も、亦已生を生起せしむるならば、二度の已生は、亦三度の生起を要し、三度の已生は、亦四度の生起を要す。是の如く最初の已生と、最後の已生とは亦是の如くな

るべし。斯くては生(Skye-pa)は無窮になるが故に、それは言ふべからず。この故に、存在は已生によりて生起せず。

若し又已生に由て生起せしめば、かの現生に由て生起せらるべく説明すれども、かの他の現生は未生を生起するが故、こゝに已生は生起せしむなりと云ふは決定(約言)と相違す。

何の故に然るや。かの最初の現生の前に於て、未生あるが故に、それより亦生起せしむるならば、これが爲に、或ものは已生を生起するが故に、或ものは未生を生起するが故に、不相應となればなり。是の如く言ふならば、亦不決定となるが故に、已作中に所作なし、已焼中に所焼なし、已去中に現去(bGrod.pa)の所作なし、現前の已作中に、現前の所作なし、已生中に生起の所作なし。

この故に只是の如く、或已生の法は亦生起せず、未生の法も亦生起せず。何の故に然るや、現生を具せざるが故にと、一切の未生も亦生に墮すべきが故となり。此に於て未生は現生を具せず、それは又現生の存在を具するが故に生起せしむるか、將た現生の存在を具せずして生起せしむと計量すとも、斯くては所作なくして又能作し、去なくして又去あり、食なくして又食あり、貪欲なくして亦貪あり、瞋恚なくして又恚あり、愚痴なくして又惑となるべし。諸の假説と相違するが故に、それは又言ふべからず。この故に未生の存在は亦生起せしめず。

若し又未生の存在が生起するならば、其等一切の未生のあらゆる義もまた生するに至るべし。そ

は一切の異生凡愚は未だ菩提を生ぜざるに、また(菩提)を生ずるに至り 諸の不動の法を有し一切の煩惱を生ぜざる阿羅漢もまた(煩惱を)生ずるに至るべく、兔と、馬とは角なきも、そは亦生ずるに至るが故に、是れまた言ふべからず。この故に未生はまた生起せず、已燒の煩惱が、煩惱を生起するが如し。

此に問て曰、未生の生起すべし、是れ又何の因と、緣聚と、境と、時と、作者と、方法とを具するるとき生起すれども、一切の未生は生起せしめず。何の因と、緣聚と、境と、時と、作者と、方法とを離れば生起せず。この故に一切の未生は生ずるに至らざるなり。

此に釋して曰、何の因と、緣聚と、境と、時と、作者と、方法とを具すれば生起すと云ふ。そは又有なるもまた生起せず、無なるも亦生起せず、有無なるもまた生起せず、この三部種によりての生起は認むべからざることは、先きに詳釋し了れり。この故に未生も亦生起せず。

是の如く生じつゝある存在も亦生起せず。何故に然るや。已生も生起すべしとの過失に墮するが故に、未生も生起すべしとの過失に墮するが故に、生じつゝあるものは、あらゆる已生も、亦先きに説ける理由に由つて生起せず。生じつゝあるものは、あらゆる未生も亦先きの説明理由に由て生起せず。若し又生じつゝあるものは生なし。されど生じつゝあるものも生起するならば、無生の生じつゝあるものは見るべからず。この故に生じつゝあるものは生起せず。若し生じつゝあるもの

が生起せば、それは二種の生に墮すべし。(一)生じつゝあるものは、總ての生じつゝある其者のと  
なる。(二)生じつゝあるものは、生起せしむる總てのものなり。二生は不合理なり。(以下原文  
p. 56a) 二生の  
存在なければなり。この故に生じつゝあるものは亦生起せず。生を始發する前に、また何處にか生  
を始發せざる(前にも)生じつゝあるものはなし、生を始發することなくば、生じつゝあるものも亦  
なきが故に、生じつゝあるものを生起せず。

是の如く、已生と、未生と、現生とを生起せるが故に、生を能く成せず、生を能く成せざれば、  
住と、滅とは能く成せず。生と、住と、滅とを能く成せざれば、有爲も亦能く成せず 是の如く其  
等は已去と、未去と、往との精釋を理解すべきなり。

此に問て曰、生を縁として生じつゝあると云ふ。此の思惟によれば、生じつゝ生起せしむるなり。  
此に釋して曰、

(15)「何時も生有るが故に、

//Gah-Tshe Skye-da Y'od-pas-ni/

この生じつゝあるものは生起なるとか、

/Skye-bShin hDi hByun Med-pahi-Tshe/

云何ぞ生に縁りて、

//ji-Ltar Skyel-la bRten-Nas-Ni/

生じつゝありと言はるゝや、」

/Skye-bShin Shes-ni bRjod-par-Bya//

「若謂生時生、」 「生に於て此の現生が、」

/Utpadyamānam utpattāv

是事已不成

表はれずと云ふとき、

idam na kramate yadā/

云何衆縁合、

云何にして現生が、

Katham utpadyamānam tu

爾時而得生。」 縁ずと言はるゝ也。」

pratitya utpattin ucyate// (p.158)

/Wenn bei der Existenz des Entstehens dieses Entstehende nicht hervorgeht,

Wie ist zu sagen ; „Vom Entstehen abhängig ist Entstehendes“?/ (p.45)

何時も現生の有るが故に、此の生じつゝあるものを發生すと云はれざることを、是の如く生に縁 (bRt-en)りて、生じつゝあるものと云はるゝなり。

又復

16) 「縁りて生ずる云何なるものぞ、」

//Rten-ciñ hByuñ-ba Gañ-Yin-pa/

そは自性によりて寂靜なり、

/De-ni No-Bo-Ñid-kyis Shi/

それ故に生じつゝあるものと、

/De-Phyir Skye-bShin-Ñid Dan-Ni/

生とは、また寂靜なり。」

/Skye-ba Yan-Ni Shi-ba-Ñid//

「若法衆縁生、」 「縁によりて生ずる云何なるものぞ、」

/Pratitya yad yad bhavati tat

即是寂滅性、自性よりも寂靜なり、

tac chāntain svabhāvatah/ (p.159)

是故生々時、それ故に生じつゝあるものと、

Tasmād utpadyamānāni ca

是二俱寂滅。』生とは、共に寂靜なり』<sup>p</sup>

gāntam utpātir eva ca// (p. 160)

/Was abhängig entsteht, das ist von sich aus (svabhāvatah) still.

Deshalb ist Entstehendes eben und Entstehen still/ (p. 45)

是の如く緣りて生ずる所有るものは、自性によりて寂靜なり。この故に生じつゝあるものと、生とは亦寂靜なり。

此に問て曰、三世(三時)の施設の中に、未來の存在は、未來の自體(bDag-Nid)によりて有するが故に、其は生ずべし。

(17)「若し未生の存在が、

//Gal-te dNos-po Ma-Skyes-pa/

或は何處かに有るならば、

/hGah-Shig Gan-Na Yod-Gyur-na/

そは是れ何の故に其處に生ずるや、

<sup>①</sup>/De-ni De Cih-Phyir Der Skye-hGyur/

有るならば生せざるべし。』

<sup>②</sup>/Yod-na Skye-bar Mi-hGyur-Ro//

「若有未生法、」若し何にかの未生の存在が、

//Yadi kaecid anutpanno

説言有生者、何處にか存せば、

bhāvah sanividyate kvacit/

此法先已有、彼は生すべし、

Utpadyeta sa-kim tasmim

便復何用生。」其處にあらざるに、何をか彼は生ぜん。

bhāva utpadyate 'sati// (Gr.160)

若し未生の存在が、或は未來の時に於て有りうるならば、そは其處に存せば、何故に今の時、生するや、そは此に有らば、有るが故に、今此に生せざるべし。(以下原文 p. 56 b)

云何にして生すと言ふや、此に釋すべし。この存在は此に生するならば、斯くては此の存在は、未來の彼の時に於て有らざるべし、そは又言ふべからず。この故に未來の存在あらば、そは生すべしと云ふ、そは不合理なり。

①、② 此の第十七偈の後二句は、本偈と月稱譯とは左の如く相異なるも、梵文と一致す。

「若し未生の存在が、 //Gal-t: dNos-po ma-Sky s-pa/

或は何處にか有らば、 /hGah-Shig Gai-Na Yod-Gyur-na/

それは生すべし、その存在が、 /De-ni Skye-hGyur dNor-po-De/

無ければ、何をか生ぜん。」<sup>③</sup> /Med-na Ci-Cig Skye-bar hGyur//

③ Ci-Cig は Ci-Shig の誤寫。

又復



汝は先きに生によりて、生じつゝあるのを生起せしむなりと云へり、かの説明を此に釋すべし。

(18) 「若し此の生によりて、

//Gal-te Skye-ba De-Yis-Ni/

生じつゝものを生起せしめば、

/Skye-bShin-pa-ni Skyed-Byed-na/

かの生を生せしむところの

/Skye-ba De-ni Skyed-Byed-pa/

生は又何ぞや。」

② /Skye-ba Yan-Ni Gani-Shig Yin//

「若言生時生、」 「若しまた此の生が、

/Utpādyamānam utpādo

是能有所生、

生じつゝあるものを生せしめば、

yadi cotpādayaty ayam/

何得更有生、

その生を云何なる生が、

Utpādayet tam utpādam

而能生。是生。」

更に生せしむる也。」

utpādah katamañ punaḥ// (p. 161)

/Wenn das Entstehen des Entstehende hervorbrächte,

Welches ist ferner das jenes Entstehen hervorbringende Entstehen? (p. 46)

若しかの生によりて生じつゝあるものを生起せしめば、さらば今かの生を生起せしむるところの生は亦何ぞや。此に是を考ふるに、他の生によりて、彼の生を生起せしむと思惟するや。

①、② この第十八偈の後二句の中、①は本偈と、月稱兩譯は左の如く相異し、其の②は月稱譯と相違す。

「若し此の生によりて、

生じつゝあるものを生起せしめば、

かの生は生を見る、

何ものによりて生起せしむ。

//Gal-te Skye-ba De-Yis-ni/

/Skye-bShin-pa-ni Skyed-Byed-na/

/Skye-ba De-ni Skye-ba Lta/

/Gan-Shig-Gis-ni Skyed-par-Byed//

此に釋すべし。

(19)「若し他の生によつて、

この(生を)生起せしめば無窮となるべし」。

/Gal-te Skye-ba gShan-Shig-gis/  
/De-bSkyed Thug-pa Med-par lGyur/

「若謂更有生、

「若し他の生が、

//Anyas utpādayaty enañi

生生則無窮」。

此の(生を)生せしめば、無窮  
となるべし」。

yady utpādo'navashīhīh//

/Wenn ein anderes Entstehen dieses Entstehen hervorbringet, so ist regressus ad infinitum

(anavasthā) / (p.46)

若し他生に依て彼の生じつゝあるものを生起せしめば、斯くては無窮に墮すべし。是れを思惟するに、生じつゝあるものを生起せしむる彼の生は、他の生起なき已生のみなりと思惟せば、此に釋すべし。

「若し生なくして生起せば、

/Ci-Sta Skye-ba-Med Skyed-Na/

一切は是の如く生起すべし。」

/Thams-Cad De-bShin Skye-bar-hGyur//

「離生生有生」

「若し生なくして、生せりとせば、

/atha-annutpāda utpannah

法皆自往生。」

一切は是の如くにして生ずべし。」

sarvam utpadyate tathā iti// (p.162)

/Wenn aber ohne Entstehen Entstandenes ist, so würde alles so entstehen. (p.46)

若し生は、生じつゝあるものを生起する彼の生が、他の生起なき已生なりと觀せば、他の一切のものも亦是の如く、他の生起なくして生ずべしと觀せらるべからなり。

又復

(20)「只有と、無とはまた、

//Re-Shig' Yod Dan Med-pa Yan/

生することは正しからず、

/Skye-bar Rigs-pa Ma-Yin-No/

有無も、亦あらず、

/Yod-Med-Ñid Kyān Ma-Yin-te/

前に説明せしことあり。」

/Goh-du bStan-pa-Ñid Yin-No//

「有法不應生」

有の生もある限り、無の

//Sataḡ ca tāvad utpatir

無亦不應生、

生起は、實に相應せず、

asataḡ ca na yujyate/

有無亦不生、

有無も、亦無なること、

Na sataḡ ca asataḡceti

此義先已說。」前に已に(説明)を生ぜり。」

pitvam eva upapād tain // (p.162)

/Daß Existierendes und auch Nicht-Existierendes entstehen, ist eben nicht richtig,

Daß auch nicht Existierendes und nicht-Existierendes (entsteht), ist früher schon gezeigt. (p. 46)

此に若し存在の或ものを生ずれば、それは有 (Tod-pa, sata) 若し無 (Med-pa, asata) を生ずべしと計量するとも、正理を以て全く觀察すれば、有を生ずことは正しからず。生を觀察すべき意義なければなり。無もまた生ずべく正しからず。無其者にてあればなり。

若し有、無は同時生なりと考ふるとも、それ亦正しからず、予は先きに(以下原文 p. 52a) 只有と無とは、亦生ずることは不合理なりと説きしことあり。又有と無と、有無とは、云何に生ずるも正しからず、是の如く予は先きに、

「何時も法は有と無と、有無とを成すべからず、云何ぞ能成を因と云ふや、斯く有らば不合理なり。」(第一品 第七偈)

と説明せり、

又復、

(21) 「滅しつゝある存在には、

/dī'os-po ĩGag-bShin-Nīd-la-Nī/

生は認むべからず。」

/Skye-ba ḥThad-par Mi-ḥGyur-Ro//

「若諸法滅時、 滅しつゝある存在は、

/Nirḍhyamānasya uppatir-

是時不應生。」 生起はありませす。」

na bhāvasya upapadyate/

/Eines vergehenden Dinges (bhāva) Entstehung geht nicht an/

此に汝は、生じつゝある存在を生起せしむと説明すれども、彼のあらゆる生じつゝある存在は、滅の法を有するが故に、また滅しつゝあるものなり。かの滅しつゝある存在に於ては、生は認むべからず。何の故に然るや。そは相互不相應の二所作に墮すればなり。滅の總ての所作は、滅しつゝある法を具すと觀することゝ、そこに又生の所作ありとするものとあり。何處に同時に滅と生とを示すべき相互の所作は二の不相應あり、そは言ふべからず、この故に滅しつゝある法を具するものは、生は認むべからず、明と闇との如し。

此に問て曰、さらば凡そ滅しつゝあるものゝ法を具せざる彼の存在は生ずべし、此に釋して曰、

「凡そ滅しつゝあらざるものは、

/Gai-Shig ḥGag-bShin Ma-Yin-pa/

そは存在を認むべからず。」

/De-ni dNos-po Mi-ḥThad-Do//

「法若不滅者、 然るに滅してあらざるものゝ

/Yaḡ cānirudhyamānas tu

終無有是事。」 彼の存在はありつゝべからず。」

sa bhāvo nopapadyate// (p.163)

/Was nicht vergehend ist, das Ding (bhāva) kommt nicht vor (upapadyate). (p. 47)

凡そ滅しつゝあらざるものは、それは滅も亦存在を認むべからず。

又復、

今存任を承認せらるゝも、亦住は認むべからず。云何に然るや、釋し曰、

(22)「已住の存在は住せず、

//dī'os-po gNas-pa Mi-g'Nas-te/

未住の存在も住せず、

/dī'os-po Mi-g'Nas gNas-pa-Min/

住しつゝあるものも亦住せず、

/g'Nas-bShin-pa Yan Mi-g'Nas-te/

未生の何ものか住せん」。

/Ma-Skyes Gran-Shig g'Nas-par-Byed//

「不住法不住、」已住の存在は住せず、

//Na sthita bhāvas tiṣṭhaty

住法亦不住、 未住の存在も住せず、

aśīta-bhāvo na tiṣṭhati/

住時亦平住、 住しつゝあるものも住せず」

Na tiṣṭhati tiṣṭhamānah

無住云何住」 未生なる何ものか住せん、

Ko'nutpannaḥ ca tiṣṭhati// (p. 164)

/Ein gestandenes Ding (bhāva) steht-nicht, ein (noch) nicht gestandenes Ding steht nicht

Ein stehendes auch steht nicht, welches unentstandene steht? / (p. 47)

只已住の存在は住せしめず、已住有ればなり。未住もまた住せしめず、已住なければなり。(以下原文 p. 57 b)  
この二より異なる第三の住しつゝあるものも亦住せず、それは無なればなり。是の如く一切の種類を全く觀察せば、未住のは何ものか住せんや。

① 原文 *Byed*, 本偈と月稱譯 *hGyur*.

又復

(23) 「滅しつゝある存在には、

//dNos-po hGag-aShin-Ni-la-Ni/

住は認むべからず、

/gNas-pa hThad-par Mi-hGyur-Ro/

「若諸法滅時、「滅しつゝある存在には、

//Shtir nisdhyamānasya

是則不應住」。

na bhāvasya upapadyate/

其處には住は認むべからず。何の故に然るや。そこに住位は相互に相違する二(位)まで墮すればなり。(一)かの住位によりて滅しつゝあると云はるゝものと、(二)そこに又住の住位なりと分別する總てのものなり。同處に同時に滅しつゝあるものと、住を示す住位とは、相互に相違するの二(位)あり、それは謂ふべからず、この故に滅しつゝあるところの法を具するものにして、住すなりと云ふ、それは正しからず。

此に向て曰、さらば今若し存在にして、滅しつゝあるところの法を具せざるものは、それは住すべしと、此にに釋して曰、

「凡そ滅しつゝあらざるものは、

/Gai-Shig hGag-bShin Ma-Yin-pa/

それは存在を認むべからず」。

/De dNos-por Mi-iThad-Do/

法若不滅者、

而も又滅しつゝあらざるもの

/Yag cānirdhyamānas tu

終無有此事。」彼の存在も生せず。」

sa bhāvo nopapad yate// (p. 164)

/Was nicht vergehend ist, das geht aber nicht als Ding (bhāva) an. (p. 48)

若し滅しつゝあらざるものは、そは又決定して存在を認むべからず。

又復

<sup>(24)</sup>「一切存在は、一切時に於て

//dNos-po Thams-cad Du-kun-tu/

老と死との法あらば、

/Rga Dai hChi-baḥi Chos-Yin-Na/

あらゆる老と死となくして、

/Gai-Dag Rga Dai hChi Med-par/

云何なる住の存在かあらん」。

gNas-paḥi dNos-po Gai-Shig-Yin//

「所有一切法、一切存在に於て、一切時に於て、

//Jarāmarāṇa dharmaṣu



皆是老死相、

老死を有する法に於て、

sarva bhāveṣu sarvadā/

終不見有法、

老死を離れたる、

tisṣṭhatti katame bhāvā

離老死有住』。

云何なる存在がある。

ye jaramaraṇāni vinā// (p.165)

/Wo alle Dinge (bhāva) zu aller Zeit mit der Eigenschaft des Alterns und des Sterbens sind

Welche sind die ohne Altern und Sterben stehenden Dinge? (p. 48)

一切の存在は、一切時に於て、老と死との法を有するとき、あらゆる死と死なくして、住の存在は云何ぞあらんや。

又復

(25)「住は他の住によりても、

//gNas-pa gNas-pa gSan Dan-Ni/

其者とによりても住は不合理なり、

/De-Ñid-kyis Kyān gNas Mi-Rigs/

應に 自生と、

//ji-ltar Skye-ba Rañ-Dañ-Ni/

他(生)とによりても生起せざるが如し』。

/gShan-gyis bSkyled-pa Ma-Yin-bShin//

「住不自相住、

「他の住によらば、

//sthiyā anyayā sthitel sthānāni

亦不異相住、

又其者(の住)によらば、  
の住はありえず、 住

tayaiva ca na yujyate/

如生不自生、

恰も生の生起が、

utpādasya ya'ha utpādo

亦不略相生。」

自我によりても、他我によりてもありえざる如くに。」

nātmanā na parātmanā// (p.165)

/Dass das stehen durch ein anderes stehen und durch (eben) dieses steht, ist nicht richtig;

Wie das Entstehen nicht durch sich selbst und nicht durch anderes entsteht./ (p. 48)

云何ぞ先きに廣く觀察せしに、生は自と、他(生)とによりて生ずることの不合格なるが如く、住も亦かの住其者と、他とによりて住ずることは不合理なり。

そは又滅を認むべからず。云何に然るや、釋して曰、(p. 58 a))

(26) 「已滅は滅せず、

//hGag-pa hGag-par Mi-Byed-De/ ①

未滅も滅せず、

/Ma-hGags-pa Yan hGrag Mi-Byed/

滅しつゝあるものも亦是の如く(滅せ)ず、

/hGag-bShin-pa Yan De-bShin Min/

未生は何ぞ滅せん」。

/Ma-Skye Gani-Shig hGag-par-Byed// ②

「法已滅不滅、

「未滅は滅せず、

//Nirudhyate nāniruddhain

未滅亦不滅、

「已滅も滅せず、

na niruddhain nirudhyate/

滅時亦不滅、

現滅も亦是の如し、

tathāpi nirudhyamānain

無生何有滅」。未生何ぞ滅せん。 kim ajātam nirudhyate// (p.167)

/Das Vergangene vergeht nicht, das (noch) nicht Vergangene auch vergeht nicht,

Das Vergehende auch so nicht; welches Unentstandene vergeht?/ (p. 49)

只彼のあらゆる滅は亦滅せず、そは滅し盡くせばなり。彼のあらゆる未滅も亦滅せず、滅の所作を離ればなり。かの二者より他に滅しつゝあるものと云はるゝ第三者も亦滅せず、そは無なればなり。是の如く知るが故に、悉く觀察するに如何ぞ未生は滅せん。

① 原文 Mi-Byed-de. 本偈と、月稱譯 Mi-hGyur-le.

② 原文 hGag-par-Byed. 本偈と、月稱譯 hGag-par-hGyur.

又復、

(27) 「只已住の存在には、

/Re-Shig dNos-po gNas-pa-Ia/

滅は認むべからず、

/hGag-pa hThad-par Mi-hGyur-Ro/

未住の存在も 亦、

dNos-po Mi-gNas-pa-Ia Yan/

滅は認むべからず」。

/hGag-pa hThad-par Mi-hGyur-Ro/

「法若有住者」 「只已住の存在には、

/Shtasya tāvad bhāvasya

是則不應滅、

滅は有りえず、

nirodho nopapadyate/

法若不住者、

未住の存在にも、

Nāsthitasyāpi bhāvasya

是亦不應滅」。

亦滅は有りえず」

nirodha upapadyate// (p.168)

/Bei einem gestandenen Ding geht eben Vergehen nicht an ;

Bei einem nicht gestandenen Ding auch geht Vergehen nicht an. (p. 49)

只かのあらゆる已住の存在には、滅を認むべからず。何の故に言ふや。已往あるが故に、或は亦已住と、滅との二者に墮すればなり。かのあらゆる未住の存在には、亦滅を認むべからず。何の故に言ふや。已住を離れるが故に、「無なればなり。

又復

(28) 「この住位によりてはかの位置は、

//gNas-Skabs De-Yis gNas-pa-Ni/

それを以ては、滅とはならず、

/De-Yis hGag-pa-Nid Mi-hGyur/

他の住位によりては、又(この)位置は、

/gNas-Skabs gShan-Gyis gNas-pa-Yain/

他の滅とはならず」

/gShan-Gyi hGag-pa-Nid Mi-hGyur//

「是法於是時、

「此の位置によりては、

//Tayā eva avasthāyā avasthā

不<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>是時滅

其と同じ位置は滅せず、

na hi sã eva nirudhyate/

是法於<sub>レ</sub>異時、

他の位置によりては、

Anyayã avasthayã avasthã

不<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>異時「滅。」

他の位置は滅せず。」

na ca anyã eva nirudhyate// (p.169)

/Durch eben diesen Zustand vergeht nicht derselbe Zustand, Durch einen anderen Zustand auch vergeht nicht ein anderer Zustand./ (p. 49)

此に凡ての存在は滅すべしと観ず、そは此の位置と、他の(位置)との二者によりても亦滅とはならず。何の故に言ふや、乳は乳の位置によりて滅せず。乳にあらざるも限り、滅性とはならざるが故に、乳にあらざる位置に於ても亦滅とはならず。何時も乳にあらざるものは、その時亦滅とはならざればなり。

① 此の僞文は本僞と、月稱譯とに對比せば、左の如く相違す。

「かの位置によりて位置は、

//gNas-Skabs De-Yis gNas-pa-Ni/

其者は滅性とはならず、

/De-Nid hGag-pa-Nid Mi-hGyur/

他の位置によりて位置は、

//gNas-Skabs gShan-Gyis gNas-Skabs-ni/

他も亦滅性とはならず。」

/gShan-Yan hGag-pa-Nid Mi-hGyur//

又復

(29) 「常に一切諸法の

//Gan-Tshe Chos Thams-Cad-kyi/

生は認むべからず、

/Skye-ba hThad-par Mi-hGyur-ba/

その時、一切諸法の、(p. 58 b)

/Dehi Tshe Chos Thams-Cad-kyi

滅も認むべからず」。

/hGags-pa hThad-par Mi-hGyur-Ro//

「如一切諸法、一切諸法の生は、

/Yadā eva sarvadharmāṇām

生相不可得、

生ば不可得

utpādo na upapadyate/

以無生相故、

是の如く一切諸法の、

Tadā evaṅ sarvadharmāṇām

相即無滅相」。

滅も生ぜず」。

nirodho na upapadyate// (p.169)

/Wenn aller dharmanas Entstehen nicht angeht,

Dann geht aller dharmanas Verfehen nicht an. (p.49)

常に正理によりて廣く觀するに、一切法の生は認むべからず。その時、一切法の滅も亦認むべからず。

又復、

(30) 「只有の存在には、

//Reg-Shig dNos-po Yod-pa-la/

滅は認むべからず、

/hGag-pa hThad-par Mi-hGyur-Ro/

存在と、非存在とは、

同一に於ては認むるなし。」

「若法是有者、 有の存在のある限り、

是則無有滅、 實に滅は生ぜず、

不應於一切、 何となれば、存在と非存在とは、

而有有無相。」 同一なることはあるはず。」

/Eines existierenden Dinges (bhāva) Vergehen geht eben nicht an.

Sein (bhāva) und Nichtsein (abhāva) sind eben nicht bei Einheit angängig. / (p.50)

此に又正理によりて廣く觀するに、只有の存在には、滅は認むべからず。何の故に言ふや、存在と、非存在とは、その同一に於ては、有を認むべからざればなり。

①② 此第三十偈は、本偈と月稱とに對照すれば、左の如く相違す、但今は「無畏疏」の偈文に據つて譯出す。

「只有の存在には、

認は認むべからず、

同一に於ては存在と、

非存在とは認むることなし。」

① /dÑos Dai dÑos-po-Med-pa Das/

② /gCig-Ñid-na-Ni ħThad-pa-Med//

/Satag ca tāvad bhāvasya

nirodho na upapadyate. / (p.169)

Ekatve na hi bhāvaḥ ca

na abhāvaḥ ca upapadyate // (p.190)

/Re-shig dÑos-po Yod-pa-la/

/ħGag-pa ħThad-par Mi-ħGyur-Ro/

/gCig-Ñid-na-Ni dÑos-po Dai/

/dÑos-po Med-pa ħThad-pa-Med//

又復、

(31) 「若し存在が無となるに於て、

滅は認むべからず、

恰も第二頭に付ては、

かの切斷の無なるが如し」。

「若法は無者、

「無なる存在にも、

是即無有滅、

滅はありえず、

譬如其二頭、

恰も第二頭に付て、

無故不可斷」。

切斷なきが如し」。

/ Auch eines nicht-existierenden Dinges Vergehen ise nicht angängig ;

So, wie eines zweiten Kopfes Abhauen nicht existiert. / (p. 50)

存在なきが故に、亦滅は亦認むべからず。何の教に言ふや、無なるが故に、恰も第二頭に付て切斷なきが如し。

// dÑos-po Med-par Gyur-ba-I-ahan/

/hGag-pa hThad-par Mi-ñGyur-ro/

/mGro-gÑis-pa-la Ji-I-tar-Ni/

/gCad-du Med-pa De-bShin-No//

/Asato'pi na bhāvasya

nirodha upapadyate/

Na dvitīyasya cīrasaḥ

chedanañ vidyate yathā//



又復、

(32) 「滅と、他の滅とは、

其者によりて亦滅するは不正なり。

云何に自生と

他(生)によりて生起あらざるが如し」。

「法不自相滅、 滅は自我によりてあらざる、

他相亦不滅、 他我によりてあらざる、

如自相不生、 恰も生の生起は自我によりてある、

他相亦不生」。

他我によりてもあらざるが如く」。

Wie Entstehen vergeht nicht durch anderes Vergehen, auch nicht durch eben dieses ;

應に先きに廣く觀せしに、生は自と他(生)とによりて生起することは不合理なるが如く、滅も亦其者と、他者とによりて滅することは不合理なり。

① ② 此の第三十二偈は、本偈と、月稱譯とに對照するに左の如く相異あり、但し梵文と一致す。

「滅は自の自我によりてもあらず、  
滅は他(我)によりてもあらず、  
恰も生の自と、  
他とによりて生するにあらるが如し」

//hGag-pa Ran-gi bDag-ñid-kyis/  
/Yod-Min hGag-pa gShan-Gyis-Min/  
/Ji-ltar Skye-ba Ran Dan-Ni/  
/gShan-Gyis bSkjed-pa Ma-Yin-bshin//

(33) 「生と、住と、滅とは、

//Skye Dan g'Nas Dan hJig-pa-Dag/

成せざるが故に有爲はなし、

/Ma-Grul-phyir-na hDus-Byas-Med/

有爲は能く成せざるが故に、

/hDus-Byas Rab-tu ma-Grub-pas/

無爲は、云何ぞ成すべき」。

/hDus-ma-Byas-ni Ji-ltar hGrub//

「生、住、滅不成、 「生と、住と、滅との、

/Uṭpāda-sthiti bhāṅgānām

故無有有爲、 不成立の故に、有爲はなし、

asiddher nāsti saṃskṛitāni/

有爲法無故、 有爲の不成立のとき、

Saṃskṛitasya aprasiddhan ca

何得有無爲。」 無爲は、云何ぞ成すべき」

kathāni setsaty asāṃskṛitāni// (p-176)

是の如く、生と、住と、滅との其等は不成就の故に、有爲はなし、有爲の不成就の故に、云何ぞ無  
爲を成就すと謂はん。

Weil Entstehen, Stehen, Vergehen nicht erreicht werden, ist nicht Gewirktes (saṃskṛita) ;

Da Gewirktes nicht erreicht wird, wie wird Nicht-Gewirktes (asamskṛta) erreicht ? / (p. 50)

此に問て曰、若し生 (utpāda) と、住 (sthitī) と、滅 (bhāṅga) とは、決定して無ならば、云何が説か  
ん。此に釋して曰、

<sup>(34)</sup>「云何に夢の如く、幻の如く、

云何に乾闥婆城の如く、

是の如く生と、是の如く住と、 (p. 59 a)

是の如く滅とを説き給へり」。

「如幻亦如夢、 「恰も幻の如く、夢の如く、

如乾闥婆城、

乾闥婆城の如く、

所説生住滅、

是の如く生と、是の如く住と、

其相亦如是」。

是の如く滅とを説き給へり」。

/Wie Traum, wie Zauber, wie eine Gandharvenstadt :

Also (beschaffen) sind Entstehen, so stehen, so Vergehen verkündet. (p. 50)

是の如く生 (Entstehen) と住 (stehen) と滅 (Vergehen) との如く等は、夢と、幻と、乾闥婆城とに似

て、唯俗諦 (kun-Rdsob) に於て現るに過ぎずと (佛は) 説き給へりと知るべきなり。

① 幻 (myā) の語義の典據、梨俱吠陀 (matraya-upaniṣad, 4, 20) に出づ。吠陀の教理は、此の世界は最高梵の創造したる流轉の世界なりとし、梵のみ實在にして、世界は幻影にして非實在なりと説けり。佛陀は吠陀の幻や夢の譬喩説を借り來つて、有爲界の生・住・異・滅の四相は、恰も幻の如し、夢の如しと説かれたに過ぎない、吠陀の如く現實の有爲界は幻なり、夢なりとは説かれなかつたのである。四相は自性によつて支持せられ、有爲は無爲によりて裏附けられてゐるが故に、有爲のみの假諦説に於ては、幻夢の如しと譬説に用ひられしも、眞諦に支持さるゝ有爲は、現象即ち實在にして、吠陀教理の如く厭世主義ではない、世間即涅槃界を示すを以て本義とせり。

ヤー(幻)の語義の「阿舍經」の出據は左の如し。

巴利相應部四二・第十三經(中阿舍經・波羅拏説)の「幻法」の文、「中阿舍經」の「諛詔、心穢品」。

「八千般若經」、「摩訶般若經」中の「諸法如幻、如水月中」。「中論」の「觀三相品」第十七偈の文。「游伽梵歌」。

阿闍梨耶、聖龍樹の造、「根本中論無畏疏」中、「生と、住と、滅とを觀すと名けらる第七品なり」

(Skye-ba Dan gNas-pa Dan hJig-pa Shes-Bya-ba-Sie, Rab-tu Byed-pa bDun-pa)io)